

中島 晴矢著

オイル・オン・タウンスケープ

かつて一九八〇年代に「東京論」と呼ばれるブームがあった。思いつくままに挙げるだけでも、松山巖『乱歩と東京』、陣内秀信『東京の空間人類学』、藤森照信『建築探偵の冒険・東京編』、吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー』などがあ

り、これに荒俣宏の『帝都物語』のような物語、大友克洋の『AKIRA』のような未来廃墟イメージ、さらに路上観察学会の動向やポストモダン論、情報都市論などが重なり合い、輝かしくも妖しい東京の魅力を発信していた。

今から振り返ってみると、こうした「東京論」ブームの背景には、投機的な経済活動によって地価を上げ続けるバブル経済があった。それは、日本の首都から国際的な経済と情報ネットワークのハブであるグローバルシティ（サスキア・サッセン）へと変貌する中

辺の外濠エリア、麻布、港北ニュータウン、墨東エリア、千歳烏山。東京とはいえ、全く異なった特徴を持つそれぞれの街の重層的な文化と歴史が、端正な文体で描きだされている。

二〇二〇年代の「東京論」

色褪せつつある街の現在を、旅途中の画家のように描く

毛利 嘉 孝

物としてちらりと登場する。二〇〇〇年代の若いアーティストのライフヒストリーとしても、興味深く読むことができるだろう。

『オイル・オン・タウンスケープ』は、二〇二〇年代の「東京論」である。バブルの、ポストモダンの喧騒が終わったあとの東京。ゆっくりと朽ち果てつつある東京。東京の郊外、ニュータウンで生まれ育った中島は、決して古層からなる東京の住民になることなく、旅の途中の画家のように街を描く。そして、その距離の取り方が二〇二〇年代という固有の時代的な東京に住まうアーティストの身振りなのだ。

（もうり・よしとかい東京芸術大学大学院国際芸術創造研究科教授・社会学・文化研究・メディア論）

東京という都市の中に近代文学の痕跡を見出す

中島の反時代的な身振りは、一九八〇年代の江戸と東京を接続する「東京論」との連続性を見ることもできる。けれども、実際にそのスタイルは不思議なほどクールで、熱

都市の風景とともに描かれるのは、中島の日常生活である。そこには、一人の若いアーティストとしての生活の記録が描かれていく（ちなみに私の名前も、彼が関わっていた渋谷という共同生活プロジェクトの登場人



四六判・240頁・2420円
論創社
978-4-8460-2181-8
TEL. 03-3264-5254

★なかじま・はるやいアーティスト。現代美術、文筆、ラップなど、インディペンデントとして多様な場やヒトと関わりながら領域横断的な活動を展開。美学校「現代アート」の勝手口講師。主な個展に「東京を鼻から吸って踊れ」、グループ展に「SUBYBIAI」アルバムに「From Insect Cage」等。